

比翼ひよくの束たばね 第五十九回

大きくはばたいてほしい

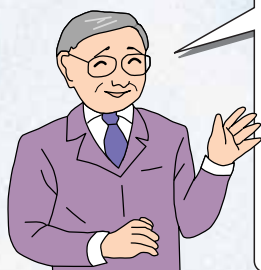
「就職の友の列車行く、響く鉄路に耳あてて追う」：昭和30年日記より

私たちの時代は、中学校を卒業すると、多くの友は都会へ働きに出た。いわゆる集団就職である。金の卵と称された中学校卒業者は、夢と希望を抱いて上京した。そして、日本の高度経済成長期を支えたのである。郷里に残る私たちは、矢板駅から友を見送った。決して華やかではなく、何となく寂しくて、人知れず涙を流した。

あれからすでに50数年が経過し、私たちは古希を迎える頃となった。少年時代をともしに過ごした友の訃報が多くなってきている。音信が絶えてしまった友もいる。

見送ったあの友は、元気であるのだろうか。少年時代を想いおこし、懐かしさが込み上げてくる。

私（市長）の思いや願いなどを市民の皆さんにお伝えします。



先頃のテレビで「上野駅への思い」が放映された。秋田県から集団就職で上京して、パン屋に住み込み、今は独立して洋菓子店を経営する人が、ドキュメンタリー風に取り上げられていた。東北の農村から上京し、さまざまな苦難を乗り越え、築きあげてきたこれまでの思い出が語られた。そして、ふるさとの父母を思い、くじけそうになると一人上野駅にきて、元気を取り戻したという。

「あ、上野駅」という歌がある。私どもの年代の者には、心にしみる歌として誰にも親しまれた歌である。実は、この歌の作曲者荒井英一先生は、矢板市の出身である。現在、長峰公園の一角に、荒井英一先生の碑が立っている。碑文には、「大正15年、矢板市本町に生まれた。少年時代は、野球と剣道の好きな腕白小僧わねびこでしたが、昭和23年NHKのど自慢に合格、声楽の勉強に励み、のちに作曲家に転じた。昭和30年代、集団就職者にとっては思い出深い「あ、上野駅」が大ヒットし、作曲家としての地位を不動のものにした。」と記されている。

ふるさととは、人生をもに生きた存在であり、そして未来でもある。

去る1月8日に矢板市の成人式が行われ、394人の新成人が誕生した。凛とした寒さの中、華やかな着物姿や新しい背広に身をつつんだ若者が新たな決意を秘めて人生の節目を迎えた。親御さんの姿も見られ、その胸の内が痛いほど良く伝わってきた。

すでに社会人として世に出、厳しい現実に直面している者、学生として勉学にいそしんでいる者、それぞれ立場は異にしても、20歳というこれまでで過ごしてきた時間の経過の中で、それぞれ青春の息吹きやときめき、感動や感激、失望や挫折、そして楽しみなど汗と涙の思い出があるに違いない。

成人式は、ひたすら己の生きる道を求め、苦しんできたさまざまな想いをお互いが暗黙のうちに認めあい讃えあい、そして、これから一人の自立する人間として力強く生きていく決意の機会でもある。

昨年におこった未曾有の震災は、人々の心に、そして社会に大きな傷跡を残してしまった。また、政治も経済も混乱し、若者にとって、未来に夢が持てるような状況ではないかも知れない。

長い人生の中には、忘れてしまいたいことや、忘れようとしても忘れられないこと、そして決して忘れてはならないことがある。特にこれまでにない

大きな震災を経験して、決して忘れてはならないことは、人と人とのつながり、人と人との信頼関係である。人は一人では生きていけない。特に成熟社会の中で、人との信頼関係、絆こそ、忘れてはならないことである。

成人者代表の決意表明は実に頼もしく、力強く感じた。

「20年前に生を受け、多くの方の支えとお導きでここまで成長できたことへの喜び、感謝の気持ちとともに成人となった今、社会に貢献する意義、責任を同時に感じています。昨年3月11日に起こった東日本大震災を体験してみても、自分ひとりの無力さ、周りの人々との協力の大切さを改めて思い知らされました。この経験を今後の人生に活かし、何事にも屈しない強靱な精神を持ち、世界を変えるぐらいの意気込みでより一層努力していく覚悟です。」

これから生きる道は、決して平坦な道ばかりではない。挫折をし、失望のどん底に打ちひしがれてしまったとき、壁にぶつかって、どうしようもなくなってしまう時、苦しみにつけ、喜びにつけ、ふるさと矢板を思い出したり、時にはふるさと矢板に戻って心をややし、元気を取り戻して欲しい。

※タイトルの「比翼の束」とは、市民と行政を翼に例え、ふたつを束ねてまい進するさまをイメージしています。